

人気小説の題材にもなった 「緑の雇用」事業

はじめて

少子高齢化社会に突入した日本で、農林水産業の中でも林業は高齢化が最も進んでいる。○か×か？。

答は「×」です。

農業に従事する方々の全国の平均年齢は、平成21年に65歳に達し今も上がり続けていますが国勢調査等によれば、林業では、平成17年の54歳をピークに、平成22年には51歳まで平均年齢が若返っており、また、30歳前後の若年層の割合が上昇傾向となっていることなどが明らかとなっています。

その結果、高度成長期以降、ひたすら減り続けていた林業に従事する方々の総数が、5万人レベルで下げ止まっ

◇ 林業従事者数及び高齢化率の推移

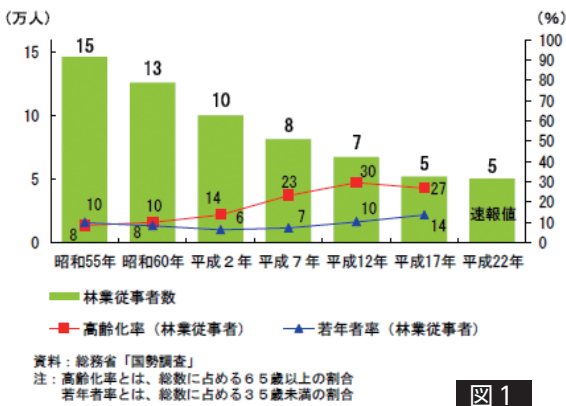


図1

たらしいこともわかってきました(図1)。

なぜ、このような状況が生み出されたのか？

様々な要因が考えられますが、本稿の主題である「緑の雇用」事業が、重要な役割を果たしていることには間違いありません。

一般的には、山間部の重労働に若い人は来てくれないというイメージでとらえられていると思います。が、発想を変えると、林業の現場では技術と身体能力を求められますし、病院などの公的施設や公共交通機関に恵まれていない山村地域に住むこと自体に若さが求められると考えれば、林業の世界こそ条件を整えれば若い戦力と呼び込めるという見方もできます。実際、足場の悪い斜面でチェーンソーや重機を使い、丸太という重量物を取り扱う林業は、危険と隣り合わせの作業であり、現場で働く皆さんには高度な技術が求められます(図2、3)。

そのような発想から、全く林業に携わったことのない方々に対して、必要

◇ 労働災害発生率(千人率)

	死傷年千人率
全産業	2.1
林業	27.7
木材製造業	7.9

資料：林業・木材製造業労働災害防止協会「林業労働災害防止年報(平成23年度)」
注：千人率とは、1000人当たり1年間に発生する労働災害による死傷者数(休業4日以上)を表したものを。

◇ 作業起因別の死亡災害

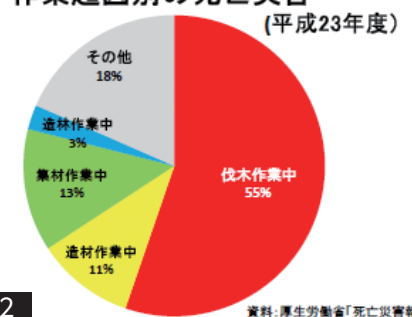


図2



図3

な技術等を身につける機会を提供する「緑の雇用」事業が開始されたのは、平成15年度のことでした。以降、新規に

◇ 新規就業者数の推移

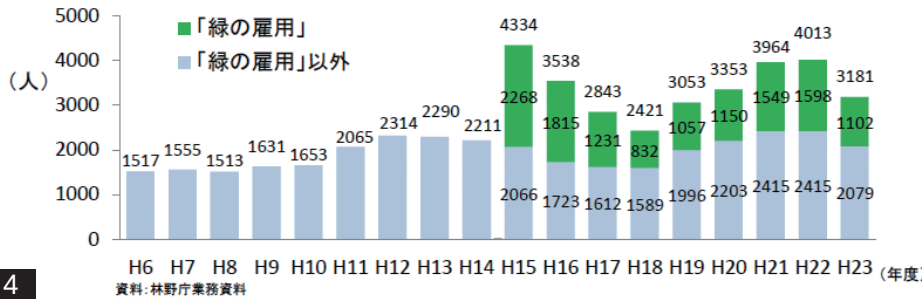


図4

その後、国の施策として平成15年度から開始された「緑の雇用」の担い手育成対策事業です。

その後、国の施策として平成15年度から開始された「緑の雇用」の担い手育成対策事業です。

バブルの崩壊以降低迷を続ける我が国の景気は、平成10年頃には「二番底」と言われる状況に悪化していました。そのような中、和歌山県では、林業に就業する者を支援して、雇用の創出、山村部の活性化と自立、そして森林の整備を同時に進めることを狙った県独自の取り組みを開始しました。

「緑の雇用」事業の10年

林業に就業する方の数は、明らかに増加しています(図4)。

バブルの崩壊以降低迷を続ける我が国の景気は、平成10年頃には「二番底」と言われる状況に悪化していました。そのような中、和歌山県では、林業に就業する者を支援して、雇用の創出、山村部の活性化と自立、そして森林の整備を同時に進めることを狙った県独自の取り組みを開始しました。

◇ 緑の雇用事業の変遷

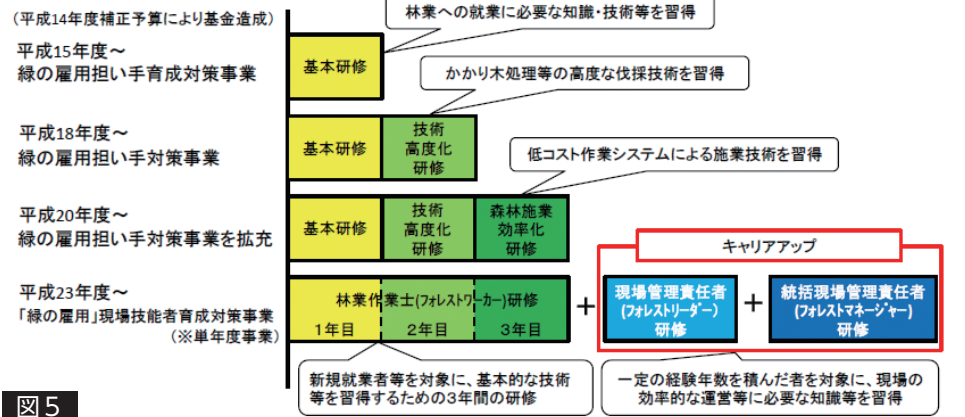


図5

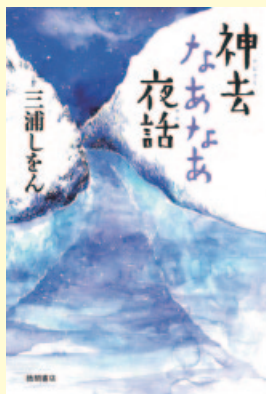
以来、10年にわたり、林野庁は「緑の雇用」事業に取り組んでまいりました。開始当時の事業メニューは、林業事業者(森林組合や林業会社)が新規就業者に対し職場内研修を行うとき、これに要する費用を1年間助成するものでした。その後、継続的に見直しを

「緑の雇用」事業を使って技術を磨き、現場の第一線で活躍している皆さんの体験談はとても魅力的です。実施主体としてこの事業とともに歩んできた全国森林組合連合会の特設ホームページ(下記)には、体験談を含め様々な情報が載せられていますので、是非、ご覧下さい。

「緑の雇用」の現況を知る

林業の研修に座学?とお思いの方もいらつしやるでしょう。もちろん、現場でベテランから直に教わるのが不可欠なのですが、それを理屈として理解することにより応用の幅が大きく広がります。また、研修生同士が集まって情報交換することも極めて有益であり、集合研修は大きな成果を上げていきます。

行い、より高度な技術を習得するための複数年研修(現在は3年)や、知見を身につける集合研修(座学と実践研修)を林業関係団体が実施する仕組みなどを導入してきました。現在では、現場を管理する立場になる方々向けのステップアップ研修(中堅職員等)に対する集合研修も行い、林業の研修において不可欠の事業(「緑の雇用」現場技能者育成対策事業)へと発展しております(図5)。



「緑の雇用」で林業の世界に飛び込んできた(飛び込まされた?)横浜出身の青年の眼を通して、林業の現場の様子はもとより、郷土の文化を大切に山村の暮らしなどが、軽い語り口とは裏腹にしっかりととした取材に基づき、厳しさと楽しさを織り交ぜて見事に描き出されている小説があります。三浦しをんさんの「神去なあなあ日常」と続編の「神去なあなあ夜話」(共に徳間書店刊)です。一般的な小説にはあまり馴染みがなくても見事に引き込まれる内容になっています。